『世界文学』89（世界文学会、1999年7月）pp. 47-59

■個人論文

“Deerne Love”、あるいは、ニコラスの密かな歓び
―『カンタベリー物語』における学僧―※

末松良道

1

学僧（“clerk”）は、中世ヨーロッパの社会における重要な社会階層のひとつとして、教会に何らかのかたちで繋がりながら、中世知識人の主体でもあった。この名称の示す人々の種類は余りにも広く、それぞれの文脈によって広義に解釈する場合と狭く限定する場合では大きく異なる。しかし、その一方で、“clerk”という言葉と共にそれに属する人々が独自のアイデンティティー、あるいは、自意識を持っていたと思われる。『カンタベリー物語』においても種々の学僧が登場するが、本論では、『粉屋の話』と『荘園管理人の話』に登場する3人の大学生、及び、下級聖職者のアブサロン、そして、『バースの女房の話』のジャンキンを出発点として、中世の若き学僧達を理解する糸口としたい。

『カンタベリー物語』のジェネラル・プロローグで、チョーサーは模範的な学僧の姿を示している。世俗のことには疎くて研究にしか興味がなく、ひたすら真面目に勉強しているだけと言う人物である。

> いちばん外がわにはおった短い上衣は、すっかりすり切れて糸が見えるくらいでした。というのも、この学僧はまだ寺禄をうける身分ではありませんでしたし、それかといって世間に職を求めるほど、世渡り上手ではなかったからでした。彼は豪華な衣服や胡弓や派手な弦楽器などより、黒や赤の装丁をしたアリストテレスやその哲学の本を二十巻、枕元においておくほうを好んだからでした。だが、彼は哲学者〔錬金術師〕であったのにどうしたものか、金櫃に金はほとんどないといったありさまでした。友だちから手に入れることのできた金は全部、本や学問のために使いました。そして彼が学校へゆく金をだしてくれた人たちの魂の平安をねがって心をこめてお祈りしました。彼は学問に最も関心をはらい、最も注意をむけていました。(*The Canterbury Tales*, I 290-303)[1]

この学僧が理想を示してしているとしても、彼が手に入れていないような地位、ここで否定されているような事実に、この人物ほど理想的ではない多くの学僧達の姿が隠されている。すなわち、多くの学僧は教会の聖職禄を手に入れることが出来なければ、何らかの世俗の職を捜して生活せざるを得ない。中世末期の社会は、教会以外の多くの組織においても知的なテクノクラートを必要としていた。また、この学僧とは違い、アリストテレスの書物を手にするために貴重な仕送りを使うよりは、洒落た衣服や楽器の購入のほうを優先する学生も多かったのは、ニコラスの楽器やアブサロンの洒落者ぶりからもうかがえる。もちろん、「高貴な意図に満ち」、「道徳にかなった」言葉を語ったというこの学僧が敬意をもって描かれている事に間違いはないにしても、詩人の目は、ちょうど象牙に塔にこもっている世間離れした学者を見る現代の企業人のように、冷めているように見える。

2

ジョルジュ・デュビーは、中世フランスにおける若い騎士集団の形成の社会的背景について研究した。彼の視点は、騎士集団を若者組としてその社会的背景を見たものであるが、彼の考え方が若い学僧について考える時、ヒントとなるのではないか、と私は考えた。[2]

デュビーの著作からうかがえる事は、11、12世紀の長子相続権の確立と共に、貴族の次男以下の男子の存在理由が薄くなる。そのような若者達は、富裕な独身女性を見つけて結婚し、その妻の家に入り込むか、高貴な女性の場合においてはよく見られたように、騎士の生活を捨て、結婚もあきらめて聖職者になるか、十字軍において組織的に見られたように新天地における新たな領地と財産の夢を求めて流浪の騎士となるか、あるいは、単に優雅ではあるが根なし草の宮廷人として、どこからか上手い結婚の口が転がり込むのを待ちつづけるしかなかったのである。そして、騎士道と、トーナメントのような騎士生活に欠かせない儀式・習慣の形成にあたっては、このような若者達がはらんでいるエネルギーの吸収という面があったと考えられる。また、そのような若者達に社会的役割のモデル、若者の憧憬の対象としての騎士像を与えたのは、折から勃興してきたロマンスだったであろう。

では、若い学僧達、特に大学生達はどのような階層の人々からなり、どういった将来を望み、如何なる欲望を持っていたのだろうか。既に見たジェネラル・プロローグの学僧のような模範的な学僧の肖像やその他の実在した大学者達が、禁欲的な学究としてのロール・モデルを提供している。しかし、信仰や学問に傾注している学生ばかりでないのは、『粉屋の話』や『荘園管理人の話』を読んでも明らかである。アラン・コバンによると、中世イングランドの大学生の多くは、地主、富農、役人、豊かな商工業者などの家系、つまり中間的な階層の出身者であった。[3] 彼らにとって大学教育は、法律家、官僚、医師などの、現在言うところの「プロフェッショナル」、つまり専門家としてのキャリアへの入り口であり、研究や信仰に人生を捧げるために大学に在籍しているのではなかっただろう。大学史研究のオーソリティーであるヘイスティングス・ラシュダルは次のように述べる。

> ヨーロッパ北部では、キリスト教会は、まさに専門職と同義語であった。王室のほとんどの官僚、外交官、大貴族の事務官や側近達、医師、建築家、ある時期までは世俗の法廷の法律家、そして中世を通じて膨大な数の教会法の法律家などが聖職者であった。・・・・王や司教や大貴族にとっては、彼の侍医や法律顧問や書記官や代理人に多額の報酬を支払うよりは、聖堂参事会員や教区牧師としての禄を授けるほうが安上がりであったのだ。[4]

マイケル・J・ベネットやR・N・スワンソンも、中世末期の英国において、ビジネス、行政、法律などの分野におけるキャリアをめざす若者達のなかに、オックスフォードやケンブリッジ大学を目ざす者が多くなり、そのような者にとって、聖職への献身は、当然と言うよりはむしろ例外的なものであった、と書いている。[5] また、大学教育にかかる多額の費用と年月を考えると、卒業生がその教育歴を最大限に生かして、キャリアを積むのは当然だった。詩人チョーサー自身は大学生とはならなかったが、その代わりに大貴族の家に預けられて、小姓をしながら、事実上、宮廷人としてかなり高度な教育を受け、将来のキャリアへの地歩を築いた。大学はそのようなキャリアへつながる選択肢のひとつとし

て考えられていた。ベネットによると、チョーサーと同時代で、やはり、ワイン商であったWilliam Tongeは、彼の遺言の中で、息子達の教育に触れているが、1人は法律教育、もう1人は、徒弟奉公か、大学教育かいずれかを選ばせる、と指定している。ベネットは、上昇指向の強い中流の人々は貴族的な功績や行動様式を模倣することに熱心であって、教育は単なる富を手に入れる道具に終わらず、それによって自分たちの階級を越える財力と地位を獲得しようとする傾向があったと指摘している。[6]

中流の階層の社会的な上昇指向は、大学、あるいは、教会、という、建て前の上では階級の枠組みを超えた人々が集まる集団に出口を見い出す。既に述べたように、大学生の出身階級は中間的な階層の人々が圧倒的に多かったようだが、貧しい農民や、逆に、貴族がいないわけでもなかった。アラン・コバンによると、1307年から1405年までのほぼ100年間に42の貴族の家の出身の88人の学生がオックスフォードかケンブリッジに在籍していた。[7] この数は決して多くはないが、しかし、中流の学生は、貴族の子弟と机を並べ、また、学生同士で議論をする機会はあったのである。ベネットが指摘しているように、中流の人々が貴族の社会的業績や慣習を模倣する傾向があるとすると、世俗的な学僧の憧憬を集めたロール・モデルの一つとして、身近にも貴族出身の学生がおり、また、当時の通俗小説とも言うべきロマンスなどに描かれた若い騎士の像があったとしても不思議ではないであろう。

3

以上の様な学僧社会の背景を考慮すると、『粉屋の話』や『荘園管理人の話』の学僧達の描写に新たな光があたるように思われる。

これら『騎士の話』に続く2つの話は、1人あるいは2人の女性をめぐって2人の若者がせめぎあい、それに老人が絡んでくるという物語の枠組みでは騎士の話と一致している。しかし、騎士の話で繰り広げられた高邁な宮廷ロマンスの枠組みをファブリオーの内容で模倣することにより、貴族的な文化のパロディーになっていることは言うまでもない。このパロディーは、単に登場人物の設定だけでなく、学僧達の言動や行動に及び、中でも、アブサロンは、たびたびロマンスの恋人のような所作や言葉使いを示している。

> ・・・〔アブサロンは〕上品な小さな声でうたいます。
>
> 「さあ、いとしの御婦人、御意のままに、願わくばわが身の上にあわれみを垂れ給え。」
>
> いとも上手にギターの音に合わせながら歌うのです。(*The Canterbury Tales*, I 3360-63)

> 彼は仲介や代理人などを使って彼女に求愛し、彼女じきじきの小姓になりましょうと誓いもしました。(*The Canterbury Tales*, I 3375-76)

> アブサロンは腰をかがめ、ひざまずいて言いました。「わたしは全ての点でお殿様だ。だってこのあと、もっといいことがおこるだろうからな。恋人よ、あなたの恩寵を。美しい小鳥よ、あなたの情けをかけてくれ。」(*The Canterbury Tales*, I 3723-26)

アリスーンに近づけない彼は、窓辺で歌を歌ったり、贈り物や仲介者など様々な手段を使うが上手くいかず、彼女と同じ屋根の下にいるニコラスと対比されており、これは、遠くから手の届かぬ女性に恋いこがれるロマンスのヒーローを想起させる。

同様の宮廷風の恋人としてのスタイルは、『荘園管理人の話』のふたりにも見られる。アランがマリーンに別れを告げる時、R. E. キャスキが言っているように、彼は叙情詩やロマンスにおける暁の別れの歌の形式を使っており、自分達の別れをドラマチックに演出しようとしている。[8]

> アランは朝方になって疲れてきました。何しろ長い一晩中骨折って働いたもんですからね。彼は言いました。「さようなら、モリー、かわいいひと。夜も明けた。僕はもうここにはいられないよ。だがいつも僕がどこへ行こうと馬で旅立とうと、僕は君に仕える真のクラークなのさ、僕に神の祝福があるかぎり。(*The Canterbury Tales*, I ll. 4234-39)

この粗野な若者は、「僕は君に仕える騎士だ」と誓うべきところで、「君に仕えるクラーク(学僧)だ」と言って、聞き手の苦笑を誘っている。そもそも、聖職者となる学僧であれば、恋人を持つ事自体誉められはしないのだが、それと同時に、登場人物の視点から見ると、アランは、学僧であることを騎士であることと重ね合わせて、プライドを感じていると言えるだろう。

『荘園管理人の話』の学僧は、恋人としてだけでなく、その他の面でも騎士を模倣しているように見える。彼らは自分達から学寮長に熱心に申し出て、この狡猾な粉屋と一戦交えようと馬に乗ってやってきたのであり、しかも、剣と盾を身につけて、まるで危険を求めて敵地に向かう騎士と従者といった出で立ちである。更に、アランがマリーンの寝床に襲いかかった後、残されたジョンは次のように言っている。

> 「ああ、悲しい」と彼は言いました。「こいつは性の悪い冗談だ。今、僕あ猿にすぎないといってもいいくらいだ。だが、僕のつれは損害にちゃんとお釣りをとっている。あれは粉屋の娘を腕に抱いている。あれは、いちかばちかやって必要なものはうまく手に入れた。だが、この僕は寝床の中でもみがら袋みたいに横になっている。このふざけ話がいつか話されたら僕は、馬鹿者や雄鳥の腰抜けあつかいにされることだろう。僕もひとつ起き上がって、いちかばちかやってみることにするか("I wil arise and auntre it, by my fayth!")。(*The Canterbury Tales*, I 4201-09)

ここに見られる"auntre"という言葉に端的に示されるように、彼らにとっては、粉屋との対決も、2人の女性の征服も、一種の冒険であり、大学の学友を含む他の若者達や、粉屋、大学の学寮長などに、自分達の男らしさを誇示する機会なのである。『サー・ガウェインと緑の騎士』において、アーサーの宮殿に帰った時、円卓の騎士達の前で恥をかかないために頑張るガウェインのように、ジョンやアランも彼らの背後の若者社会を意識しているのだ。

これらは騎士物語、あるいは、騎士的なもののパロディーである。しかし、パロディーは、それ自体、ある程度現実的であってこそ成り立つのではないだろうか。学僧達の一部に、不相応な背伸びをして騎士を模倣する若者がいたからこそ可能になるおもしろさだと考えられる。

4

これまでの議論で、学僧のロール・モデルとして、騎士の姿が影響している可能性を示した。しかし、例外的な場合を除いて、学僧が騎士のように武力をふるうことで男らしさをアピールすることはできない。一方、もう一つの貴族的なモデルである宮廷風恋愛については、学僧が

そのマナーなり、言語を取り込む事は可能であろう。

そうして考えると、それぞれ若者集団として、騎士と学僧には共通点が多いように思われる。彼らは10代で親元を離れて、一方は社会的身分が上位の王侯貴族の下に、他方は学寮などに預けられ、若者の集団として教育される。騎士にしろ学僧にしろ、彼らの多くをしめる次男以下の男子は、相続によらない手段で未来を切り開かなければならない。若い騎士にとっては、豊かな結婚相手を探し当てて、妻の家に入るのが理想ではあるが、いつまでも独身のままで過ごすこともある。

一方、学僧の多くは基本的に独身を強いられる。既に述べたように、彼らの多くは官僚や法律家などの専門職として、教会組織の内外で活動することになるのだが、しかし、司祭、あるいはそれ以上の聖職者としての碌を授与されて、それが彼らの生活と身分を支えるのであれば、結婚する事は出来ない。また、聖職者の多くがテクノクラートとしての実務に従事しているのであれば、教会にとって、彼らを、全く世俗の知識人から区別する分かりやすい指標のひとつは、妻帯させないということであろう。しかし、実務家として、また社会的成功の手段として、学僧になった多くの中間層の人々にとって、如何にそれが高貴な理想であれ、女性から一生遠ざかるというのは、困難であったことと思われる。14世紀の司教区聖職授与記録（episcopal ordination lists）を研究したバージニア・ディビスは、アブサロンのような多くの下級聖品（minor orders）に属する下級聖職者は、上級聖品（major orders）に叙せられて結婚が出来なくなるのをできるだけ引き延ばすなどして、後戻りの出来ない進路の決定をためらう傾向があると指摘している。[9] もちろん、生活の安定のためには教会からより高い地位を授与されるにこした事はないが、それは生涯の独身生活を意味していたので、ためらわざるを得なかったのではなかろうか。騎士にしろ、学僧にしろ、結婚したくても出来ず、安定した未来の展望も開けない若者にとって、ひとつの救いは、彼を精神的にも経済的にも庇護してくれる高位の既婚夫人であろう。宮廷風恋愛を論じながら、クリスチアーヌ・マルチェロ-ニジアは、若い騎士について次のように述べている。

> 宮廷風恋愛の発明によってもたらされたもののひとつは、若者が領主に経済的に依存しているという事実がそれほど目立たなくなると言うことであるといっても良いのではなかろうか。高貴な既婚の貴婦人は、彼女と相思相愛の関係にある若い騎士の庇護者となる可能性がある。12世紀のラーンスロットから15世紀のヨハン・ド・サントルの場合に至るまで、愛を受ける女性の本質的な役割は、社会的、経済的な庇護を与えることである。[10]

このような男女の関係は、程度の差こそあれ、中産階級の学生や聖職者にも起こり得たのではないだろうか。『粉屋の話』の若き奥方であるアリスーンは、年をとった夫とは生活のため、あるいは実家のための結婚をしたのであろうから、若く魅力的な下宿人のニコラスに引かれざるを得ない。ニコラスやアブサロンから見ると、彼女は異性としての魅力だけでなく、大工の妻に許される限りの贅沢な生活をしており、更に、そのうち未亡人となって、かなりの財産の相続が見込まれるだろう。アブサロンが教会に集まる女性達に日頃からこびているのも、異性と言うだけでなく、町の奥方達の豊かさに引かれてもいるのではないか。一方、『荘園管理人の話』のケンブリッジの学生アランにしても、シムキンへの最初の挨拶を次のように始めているからには、女性達のことが初めから頭にあったの

だ。

> まずアランが話しました。「やあシモンさん、お達者かね、ほんどうに。お前さんの美しい娘さんと奥さんはどうです。」(*The Canterbury Tales*, I 4022-23)

ニコラスが学問や上級の聖職者への道を諦め、ジョンが亡くなった後アリスーンと結婚してかなりの財産を手にしたとすると、これは『バースの女房のプロローグ』のジャンキンとアリスーンの関係と大体同じになる。チョーサーもそれを意識していないはずはない。バースの女房自身はジャンキンに大変な熱の入れようだが、女性嫌悪がはなはだしいジャンキンは本当に彼女を愛しているか疑問もある。バースの女房とジャンキンの結婚は、ジャンキン以前の彼女の結婚における夫婦関係、つまり、生きていくために結婚せざるを得なかった若い妻と自分の欲望を満たすために結婚した年寄りの夫、という夫婦関係の男と女をアイロニカルに逆転させたものだと言われる。そして、彼女が語る話のなかでの、宮廷の貴婦人達の裁判を考えあわせると、力を持った年長の女性とそれに頼る若者の図式が、宮廷風恋愛のような貴族社会のモデルを越えて、少なくとも『カンタベリー物語』のなかでは、学僧やブルジョワへと波及しているのではないかと考えられる。

5

これまでの議論で、学僧のロール・モデルとして、騎士の姿が影響している可能性を考えた。しかし勿論、学僧が騎士を模倣すると言っても、騎士の天職である武力を誇示することは普通あり得ない。彼らが騎士社会のモードを模倣するとしたら、様々な宮廷風のマナーや恋愛作法によってであろう。

若い騎士と貴婦人の間のいわゆる宮廷風恋愛は、学僧と世俗の女性との愛と、社会的には正式に実りを認知されないという点で共通点を持っている。そもそも、宮廷風恋愛という現実性を帯びた伝説の形成において、学僧たちは大きな役割を果たしてきた。クレティアン・ド・トロワやアンドレーアース・カペルラーヌースなどは、学僧であったと考えられており、多くの騎士道ロマンスは、こういった学僧達によって執筆されたと思われる。これは、文字知識を自由に操れる階層がほぼ聖職者に限られていた時代においては、テクニカルな面で必然的な事であった。盛期中世以降のロマンスの成立と展開における学僧の役割を検討するのは、本論のスコープを遙かに越え、また、筆者の能力の到底及ばない大きなテーマではあるが、学僧がロマンスを貴族達に捧げるために創作する際、騎士道の理想とともに、自分達の主張や感覚、欲望を、意図的にか、あるいは知らず知らずにか、持ち込んでいたとしても不思議はないと思われる。学僧の抱く、実らぬ愛の幻想が、宮廷風恋愛の伝説形成に影響があったとも考えられる。別の言葉で言えば、学僧であり、文学の創造者であった者達は、ロマンスの恋愛表現の創作に、代理的な喜びを発見したのかもしれない。

この点で興味深いのは、その著作で恋愛の手ほどきをしながら、同時に礼拝堂付き牧師でもあったアンドレーアース・カペルラーヌースである。彼は、その『宮廷風恋愛の技術』において、第1の書、第7章を「聖職者の恋」と題して論じ、また、第6章、第8の対話に登場する対話者は自分が聖職者であって、聖職者は恋人として俗人に劣らない、むしろ、俗人以上である、と言う意見を詳しく述べている。

> 僕自身確かに聖職者の職務に拘束されておりますが、罪の中で身ごもられた者ですし、他の男性たちと同様に肉体的堕落に陥りやすい傾向があるのは当然のことです。確か

に、神は聖職者が神に仕えその御言葉を告げる使徒たることを望まれ、彼らに大きな名誉を負わせましたが、肉欲の衝動と罪の原因を取り除くためにも彼らの任務の状況を改善しようとはしませんでした。それ故、主なる神が聖職者に俗人よりもいっそう厳しい禁欲を課し、彼等を二重の重荷で消耗させようとするのは信じられません。聖職者が俗人より肉体的純潔を守らなければならない理由はどこにありましょう。[11]

従って、僕が女性に求愛しても、聖職者の身分を理由に拒むことはできません。聖職者こそ俗人以上に恋愛の相手として当然選ばれてしかるべきで、そのわけを申し上げましょう。というのは、彼は俗人よりもあらゆる点で慎重かつ思慮深く、いっそうの節度をもって自分を律し、何事につけほどよく治めることに慣れております。また、聖職者であるため、彼は書物を通して得たあらゆる知識を持ちあわせています。従って、聖職者は恋愛の対象としては俗人より遙かに適していると言えます。何故なら、愛に関するあらゆることを処理する経験に恵まれていることが、この世で一番重要なことは明白ですから。[12]

更に、カペルラーヌースのこのような題材の設定は孤立した例ではない。シャルル・ウルモンが編纂した書物に集められているように、12世紀以降、ラテン語やフランス語などで残された一連の作品が、恋人としての学僧と騎士を比較している。こういった作品は学僧が書いたと推測されており、恋人として、騎士以上に学僧が優れていることを強調している。一例として、作者不詳のラテン語作品『ルミールマンの公会議』(*Concile de Remirement*) の一部を引用しておく。この作品の登場人物の一人である貴婦人は恋人としての学僧を褒め称え、騎士にはるかに勝ると結論を出している。

常に私たち〔貴婦人達〕は学僧の好意、賞賛、想い出を好んだし、彼らをより愛することを望んでもいる。私たちが常に好み、欲してきたのは、私たちをしばる掟ではなく、学僧達と一つになることだ。学僧が優しく、優雅で、親切であることを私たちは知っている。彼らこそ礼節と善良さを兼ね備えているのだ。彼らは人を騙したり中傷したりはしない。愛においても、経験と器用さを身につけていて、私たちに美しい贈り物を与え、約束には忠実である。彼らは女性を優しく愛し、すすんで捨てたりはしない。だから私たちは他のどんな男達よりも彼らを選ぶ。[13]

この作品において、学僧の長所として強調されているのは、彼らが恋人として礼節をわきまえ、経験や技術を持ち、秘密を守ることが出来るといった点だが、これらの特徴は、カペルラーヌースや、あるいは密かな恋の手管を誇るニコラスの自慢にも、共通している。更に、『荘園管理人の話』の原作を含め、ドミニク・ブーテが言うようにフランス語のファブリオーの多くにおいて女性をめぐる戦いの勝利者は、学僧と放浪の騎士なのである。[14] 個々の作者の創作意図はともかく、学僧達を恋人として、それも騎士に負けない恋人として創作する伝統があったことがうかがえるだろう。

一方、愛の教師カペルラーヌースは、第3の書において、こういった恋の技術全体を知った上で、その実行を差し控えさせることが本書の目的である、と書いてもいる。周知のように、この宮廷風恋愛の指南書は、前半と後半でコペルニクス的逆転を見せ、前半の恋の賛美や手練手管の開陳の後に来るのは、恋が如何に避ける

べき忌まわしく煩わしい事か、そして何より、恋の相手たる女性が如何におぞましい存在かという主張である。

> ・・・女性は皆、生来吝嗇であるばかりか、嫉妬深く、他の女性を中傷し、強欲で胃袋を満たすのに忙しく、気紛れで、言うことは矛盾し、不従順で、禁じられたことに逆らい、傲慢の悪徳に染まり、無益な名誉を追い求め、嘘を吐き、酒を好み、お喋りで、秘密は守らず、極めて放逸にしてあらゆる悪徳をしでかす傾向を持っている。その上、心底愛情をもって男性を愛そうとはしない存在でもある。[15]

彼の口汚い女性嫌悪を見せつけられると、それまで読んできた事細かな恋の手引きはいったい何であったのか、多くの読者は混乱せざるを得ず、前・後半を結び付ける事になっている取って付けたような説明では納得しがたい。

しかし、R・ハワード・ブロックが、宮廷風恋愛の幾つかの古典的作品を検討して、主張するように、しばしば、宮廷風恋愛の世界では、このような甚だしい女性嫌悪と女性崇拝が表裏一体をなしていたようである。[16] ここでは、大きな文化史的問題に入らず、私の出発点である『カンタベリー物語』の女性嫌悪者ジャンキンの場合に限って考えたい。彼は、アリスーンと（少なくとも彼女の側では真実である）熱烈な愛によって結ばれながらも、女性一般を嫌悪してとどまるところがない。ジャンキンは、かっての学僧として、おそらく一度は聖職者になることを目指した人間であり、キリスト教会の文化に根付いていた反女性主義の伝統を吸収し、その様な書物を愛読書として常々妻に読み聞かせている。しかし、カペルラーヌースが言うように、聖職者とて肉欲に刺激されるのは当然で、ほかの人と変わりない、とすると、彼もバースの女房の愛にひかれたのか、あるいは、彼女の財産に魅力を感じたのかもしれない。カペルラーヌースの手引き書に見られる、女性に対する極めて矛盾し屈折した見方は、二人のアリスーンをめぐってのニコラスからジャンキンへの移り変わりと通底するものがありはしないだろうか。ニコラスの“deerne love”、彼の巧みで密かな恋愛劇の舞台演出は、カペルラーヌースのいう、俗人よりも賢さや慎重さに勝り、自己を抑制する力もある学僧のものであり、ニコラスが、「学僧が大工を騙せなくてどうする」、と自慢して見せるあたりは、聖書研究のおかげで全ての知識に秀でる事を誇りとしている、知識人としての彼ら共通のプライドを示している。多くの学僧は聖職者であると同時に世俗の世界を渡ってゆくテクノクラートでもあり、しかも間近にいる経済力や権力のある女性とも交渉があるだろう。そのような彼らが恋愛に走るとき、それがニコラスやアランのようなつかの間のものであれ、ジャンキンのように妻帯するのであれ、聖職者として憎むことを教えられてきた自他の肉体や欲望に屈することになるだろう。ジャンキンの女性嫌悪は、そのような、学僧文化の特殊性から出た、いわば自己嫌悪の表現であるが故に、あのように激しく執拗であると思わざるを得ない。一方、ニコラス、アブサロン、ジョン、アランのような軽薄な若者達にしても、彼らが今後教会のヒエラルキーを上っていくのであれば、彼らと交わる女性達は、聖職授与の前のひとときの快楽の相手にすぎない。そうした彼らは、女性を自分たちの肉体的欲望の投影として捉えており、その欲望を装飾する道具立てとして宮廷風恋愛の装いを借りている。しかしそうした見せかけの背後には、女性を男性の欲望に沿って形作られ、それを受容するだけの性として、あるいは、他の男性の物的所有物として見て、人間として見ることの出来ない、荒涼とした女性観がはっきりと見える。

ジョンやアランがシムキンへの「合法的な」報復と考えて犯したレイプ、アブサロンが意図していた、アリスーンに対する焼けた鍬の刃による攻撃などは、彼らの刹那的で冷酷な女性観を示している。

6

以上、『カンタベリー物語』の5人の学僧を論じながら、中世の学僧社会を社会全体の流れの中において見直そうと試みた。中世の社会は種々の高度な実務家として学僧達を様々な世俗の職業において活用しており、学僧達自身の宗教性もそれにつれて揺れ動いていたと考えられる。しかし、勿論彼らは学僧である限り妻帯は望ましくなく、女性と大っぴらに交際できないと言う条件に変わりはない。一方で、世俗の世界と交わりながら生きていた学僧達、特に『カンタベリー物語』にも見られるような若い大学生や下級聖職者などは、騎士道や宮廷風恋愛のような貴族社会の男性のロール・モデルに少なからず影響されていた、又それと共に、宮廷風恋愛の伝説形成そのものにも、学僧の特殊な感覚が反映されているのではないか、というのが、私の当面の結論である。

注

※　本論は、日本中世英語英米文学会第14回大会（1998年12月6日、山口県立大学）における口頭発表を修正したものである。本論の執筆時に、筆者の文献についての質問に親切にお答え下さった東京大学教養部の松村剛先生に深くお礼を申し上げたい。なお、引用文の翻訳は、特に断ってない場合、拙訳である。

1. 『カンタベリー物語』のテキストは、Geoffrey Chaucer, *The Riverside Chaucer*, 3rd ed., ed. Larry D. Benson (Boston: Houghton Mifflin, 1987)を参照した。引用した訳文は、桝井迪夫、訳、『カンタベリー物語』全3巻（岩波書店、1973-95）を使用させていただいたが、一部、本論の主旨に沿って訳語を修正させていただいた。
2. Georges Duby, *Le Chevalier, la femme et le prêtre: le mariage dans la France féodale* (Paris: Hachette, 1981).（『中世の結婚–騎士、女性、司祭』篠田勝英、訳〔新評論、1984〕）; —, *Mâle moyan âge: de l'amour et autres essais* (Paris: Flammarion, 1988).
3. Alan B. Cobban, *The Medieval English Universities* (Aldershot: Scholar Press, 1988) p.302.
4. Hastings Rashdall, *The Universities of Europe in the Middle Ages*, 3 vols, (1895), new edition, eds. H.M. Powicke and A.B. Emden (Oxford: Oxford U P, 1936) vol.3, p.446.
5. Michael F. Bennett, "Education and Advancement," in *Fifteenth-Century Attitudes: Perception of Society in Late Medieval England*, ed. Rosemary Horrox (Cambridge: Cambridge U P, 1994)pp.79-96; R.N.Swanson, *Church and Society in Late Medieval England* (Oxford: Blackwell, 1989).
6. Bennett, pp.91-92.
7. Cobban, p.314-15.
8. R.E. Kaske, "Aube in *The Reeve's Tale*." ELH 26 (1959) pp.295-310.
9. Virginia Davis, "Episcopal Ordination Lists as a Source for Clerical Mobility in England in the Fourteenth Century," in *England in the Fourteenth Century*, ed. Nicholas Rogers (Stamford: Paul Watkins, 1993) pp.152-70.
10. Christiane Marchello-Nizia, "Courtly Chivalry," in *Ancient and Medieval Rites of Passage*, trans. Camille Naish (Cambridge, Mass.: Harvard U P, 1997), vol. 1 of *A History of*

Young People in the West, eds. Giovanni Levi and Jean-Claude Schmitt, 2 vols. (1997) p.169.

11. アンドレーアース・カペルラーヌース、『宮廷風恋愛について』瀬谷幸男、訳（南雲堂、1993）pp.111-12。
12. カペルラーヌース、p.113。
13. Charles Oulmont, *Les Débats du clerc et du chevalier dans la littérature poétique de moyen-age* (Paris: Champion, 1911) pp.102-03.
14. Dominique Boutet, *Les Fabliaux* (Paris: Presses Universitaires de France, 1985) p.112.
15. カペルラーヌース、p.208。
16. R. Howard Bloch, *Medieval Misogyny and the Invention of Western Romantic Love* (Chicago: U of Chicago P, 1991).